

豊かな言語感覚を育む単元の開発と実践

－「言葉」と「見ること」の関係性を考え、映像を言語化する表現活動を通して－

若林 卓

(静岡大学教育学部附属静岡中学校)

Development and Practice of Units That Foster a Rich Sense of Language Skills
-Thinking About the Relationship Between "Words" and "Seeing" Through Expressive Activities That
Verbalize Images -
Suguru Wakabayashi

要旨

静岡大学教育学部附属静岡中学校国語科では、国語科の学びを通して育みたい人間像を「豊かな言語感覚をもつ人」とし、意図的な題材配列を組みながら授業を構想している。今回、二冊の本を読んで語り合い、考えを深めていくことと、視覚障害者向けの映画の音声ガイド制作をつなげる単元を開発し、実践した。授業を通して、子どもたちが言語感覚を磨いたり、言葉を見つめたりしながら豊かな言語感覚を育んでいく学びの足跡を報告する。

キーワード： 言語感覚 映像テキスト 言葉 吟味 言語化 見る 視覚 音声ガイド

1 はじめに

静岡大学教育学部附属静岡中学校国語科では、国語科の学びを通して育みたい人間像を「豊かな言語感覚をもつ人」とし、言葉自体の価値に目を向け、言葉を大切にできる人を育むことを目指してきた。そのために、意図的な題材配列を組み、子どもたちが「言葉を吟味し、言語感覚を磨き、題材に描かれた価値や人々の生き方、考え方に対して自分なりの考えをもつ」学びを重ねられるような授業づくりを行っている。

本校の子どもたちは、題材と出会い、言葉の世界に浸りながら、自分の考えを更新することを繰り返し、自分の価値観やものの見方を豊かにしていている。一方で、自分の考えや思いを表現することにおいて、相手に伝えたい思いをもってはいるものの、発する一語にとことんこだわったり、時間をかけて言葉を吟味したりすることについては課題があると言える。

あるとき、音楽の授業で興味深い子どものあらわれと出会った。子どもたちが、自分たちの演奏にジャズらしさを出そうと試行錯誤する際、仲間との対話や授業後の追求の記録において、次のような発話や記載が見られたのである。「バーで流れているような感じ。」「わたしたちの演奏、映画とかで主人公がやられたあとみたい。」「最初はこのA音とB音が別々で、BがAを追いかけいている感じがしたけど、途中からAとBがランデヴーしている。」「雰囲気的には夜のピクニックという感じ。」「のっぺり感」子どもたちは、音や音楽という言葉にしにくいものを、自分のもっている言葉を駆使しながらなんとか説明しようとしていた。言葉を生み出そうとするその姿は、とても素敵だった。

本稿では、言葉を生み出したくなる場に子どもたち

を立たせ、よりよい表現を求めて言葉を吟味することを通して、「言葉」に対する見方や考え方を豊かにしていくことをねらいとした実践を報告する。

2 題材「『言葉』を見つめる」の価値と構想

(1) 本題材の価値

①『目の見えない白鳥さんとアートを見にいく』の価値

本書は、川内有緒氏によって書かれたノンフィクション作品である。著者が、全盲の美術鑑賞者である白鳥健司氏とともに美術鑑賞することを通して、感じたことや考えたことがつづられている。普段、当たり前視覚から情報を得て、「もしも視覚がなかったら」という視点はもち合わせていない読者が本書と出会うことで、以下のような思いや考えをもつことができる。

第一に、「見ること」とはどういうことかについての考えである。白鳥さんの美術鑑賞のエピソードに触れることで、「見る」とは視力だけでなく、過去の経験や記憶が関わってくることや、見た気になっていたものが、実はしっかりと見えていないことがあることに気づくのである。つまり、これまで当たり前にしてきた「見ること」を問い直すことができる。

第二に、「見ること」と「言葉」との関係についても考えることになる。白鳥さんは、言葉を使った「見る」行為において、「正しさ」を求めておらず、美術鑑賞の目的は、正解を探すことではなく、対話によって認識を共有することとしている。読者は、「正しさ」を求めていないのならば、「言葉」に何を込めればいいのかという疑問をもったり、自身の体験と重ねたりしながら、「見ること」と「言葉」の関係について興

味を抱くこととなる。

②『目の見えない人は世界をどう見ているのか』の価値

本書は、著者である伊藤亜紗氏が視覚障害者の方たちと対話をする中で、感じたことや考えたことがつづられている。本書と出会うことで、読者は、以下のような思いや考えをもつだろう。

第一に、言葉には「情報」と「意味」の要素があることについての考えである。著者によれば、「情報」は客観的であり、「意味」は主観的な要素が含まれる。また、言葉を発する側が意図的にどちらかを込めることもあれば、言葉を受け取る側がどちらかとして受け取ることもある。そのような考えに触れ、読者は、これまでの自分の経験をもとにしながら、言葉の要素や役割について考えていくことになる。

第二に、見えない人が言葉を受け取る意味についての考えである。見えない人は言葉を頼りにしながら、受け取った情報をもとに想像し、間違っていたらその都度更新し、柔軟にものごとを見ている。本書にある「他人の目でものを見る」について、読者は、視覚障害者だけでなく、晴眼者である自分たちにも言えることであると気づくことができる。そして、見たものを言語化していくことについて考えていくこととなる。

③音声ガイドの価値

音声ガイドとは、視覚障害者が絵画鑑賞や TV 番組視聴、映画鑑賞をするための音声による作品のガイド（補助的な説明）である。本題材では、映画の音声ガイドを取り上げる。補足的に説明されるものは、情景や状況、登場人物の表情や視線や行動などである。視覚障害者が音声ガイド無しで映画を鑑賞しようとした場合、視覚による情報は取り入れることができないため、セリフ、効果音、BGM のみで映画を鑑賞することになり、作品を十分に味わうことはできない。音声ガイドを活用することで、視覚障害者も映画の世界に入り込むことができ、鑑賞を楽しめることになる。

(2) 願う子どもの学び

本題材で願う子どもの姿は、以下の二つである。

一つめは、文章を読むことを通して、「見ること」と「言葉」の関係性について自分の考えを形成し、仲間と語り合いながら、その考えを広げたり深めたりしていく姿である。

二つめは、音声ガイド制作を通して、視覚障害者に映画を味わってもらうための表現にふさわしい言葉選びにこだわり、言葉をじっくりと吟味する姿である。

また、その際、文章を読んで語り合っただけで考えたことと音声ガイド制作のために言葉を選ぶことを往還する姿があるだろう。文章を読んで考えたことを言葉選び

につなげたり、言葉選びをしようとする中で、考えたことを実感し、これまでの自分の考えを更新したりしていく姿も期待する。

(3) 題材構想

- ① 『目の見えない白鳥さんとアートを見に行く』『目の見えない人は世界をどう見ているのか』を読んだ感想を交流し、追求テーマを決めよう（1～2時）
- ② 追求テーマ「『見ること』と『言葉』はどう関係しているのか」について考え、語り合おう（3～6時）
- ③ 映画の音声ガイドをつくろう（7～20時）
- ④ 最終追求をしよう（21～23時）

(4) 授業者の意図

①本を読んで考えること、映画の音声ガイドを制作することをつなげる

子どもたちが題材を通して願う学びに近づくために、音声ガイドを制作すること自体が目的となってしまうようにしないようにする。なぜならば、それでは、成果物のみを目を向けて終わってしまう姿や、じっくり言葉と向き合っていない姿が予想されるからである。そこで、文章を読んで考えることと音声ガイド制作をすることのつながりがある題材構想をした。それにより、二つの活動を往還する姿を生み出すことをねらいとした。

②本を読んで語り合い、自分の考えをもつ

子どもたちが「言葉」について語り合い、自分の考えをもつからこそ、言葉を選ぶ際の根拠や言葉を吟味することへのこだわりが生まれると考える。そこで、『目の見えない白鳥さんとアートを見に行く』と『目の見えない人は世界をどう見ているのか』を読み、語り合い、考えを深める場を設ける。同時に二冊の本と出会い、複数人の考え方にふれることで、共通点や相違点に目を向けながら、子どもたちは、「見ること」を問い直し、「見ること」と「言葉」の関係性について考えをもつことができると考えた。

③映画の音声ガイドを制作する

自分なりの考えをもった子どもたちが言葉を吟味しなくなる場面を設定するために、映画の音声ガイド制作を行う。映画の音声ガイドを制作しようとする、必然的に、作品の解釈の必要性、見えるものの言語化、相手意識、時間の制限、音やセリフとのかかわりやタイミングなど、多くの難しさと向き合うこととなる。それは、考えたことをもとにしながら実際に「見ること」をしたり、よりよい「言葉」を選んだりしたいという子どもたちの原動力につながると考えた。そして、そこには、言語化する難しさの実感や言葉で伝わることの喜び、言葉のもつ価値への気づきも伴うことになるところ。普段は言葉にしないものを言葉にしようと

することで、試行錯誤を繰り返しながら、こだわりをもって言葉を吟味する姿があることを期待した。

また、音声ガイド制作中においても、言葉にこだわりたいという子どもたちの思いを引き出すことが大切である。そのため、言語感覚が異なるもの同士がかかわり合いながら制作していく場を設けたり、音声ガイド制作者である平塚千穂子氏に、実際に音声ガイドづくりのアドバイスをいただくこと、さらには、作成した音声ガイドを平塚氏と視覚障害者である石井健介氏に鑑賞していただき、価値づけをしていただくことのできる場を設けることとした。

④短編映画『陽なたのアオシグレ』を扱う

『陽なたのアオシグレ』は、石田祐康監督による短編アニメ映像作品である。小学4年生の陽なたが、好意を寄せる時雨の転校に動揺しながらも、自分の心と向き合い、勇気を出して一歩踏み出すという、子どもたちにとってわかりやすく、爽快なストーリーである。

一方で、現実場面と主人公の心の場面の転換、登場人物の細かな表情、鳥たちの躍動感、主人公の心を映し出す情景描写など、いざ言葉にしようとする、難しさを感じる場面がいくつもある。だからこそ、本作品の音声ガイドを作成することに価値があると言える。子どもたちは必然的に、よりよい表現をしようと言葉を吟味するだろう。本作品は、子どもたちにとって言葉で表現しがいのある魅力的な作品であると言える。

⑤追求の記録、最終追求を行う

子どもたちがこれらの活動をする中で、考えることと言葉を選ぶことを往還しながら、自身の言葉選びの特徴や視点を自覚したり、言葉の伝わり方を実感したりすることで、よりいっそう言葉を見つめることを促したい。そのために、自分の考えを形成する場面においても、音声ガイド制作をする場面においても、毎時間、自分の思考をふり返る追求の記録を書きまとめていくこととする。どんな言葉選びに頭を悩ませたのか、どんなことにこだわって言葉を吟味したのかを子どもたちはふり返るだろう。

そして、題材の最後に、それらを通して何を考えたのか、言葉への見方がどう変わったのかなど、最終追求として書きまとめることとした。

3 授業の実際

(1)『目の見えない白鳥さんとアートを見に行く』『目の見えない人は世界をどう見ているのか』を読んだ感想を交流し、追求テーマを決めよう(第1・2時)

授業者はまず、班の代表者だけがお題の絵を見て、それを班員に口頭で伝え、班員がホワイトボードにその絵を再現するミニゲームを子どもたちと行った。子どもたちが、目で見えたものを言葉で伝えることの難し

さを実感したところで、視覚障害者である白鳥健二さんを紹介した。その後、今回の題材が『目の見えない白鳥さんとアートを見に行く』『目の見えない人は世界をどう見ているのか』であることを伝え、作品を範読し、初読の感想を交流していく中で、以下のような発言があった。

- ・生まれつき全盲の人に対し、「犬」「カラフル」と説明して伝わるのだろうか。犬や色を見た経験がなかったら、それ自体が想像できないのではないかな。
- ・視覚障害者は、「見よう」とか「見たい」という思いがない人もいるかもしれない。形で判断するのではなく、その言葉から想像を膨らめていくのだろうか。
- ・ミニゲームで犬の頭に乗っていたものを、りんごと説明していた人と赤い花と説明していた人がいた。頭の中の想像が違うところか、目の見える人が同じものを見ている、捉え方自体が違っている。つまり、見え方が違っていると言える。
- ・僕は最後に答えを見ているが、目の見えない人は答えを見ることはない。答えを見れば、合っているとか間違っているという認識になるが、答えを見なければその認識もない。

感想を交流していく中で、本文中にある「他人の目で物を見る」という言葉に対する疑問をもった子どもの発言をきっかけとし、話題は「言葉」と「見ること」と「想像すること」に焦点化されていった。

- ・「他人の目で物を見る」「耳で見る」とはどういうことだろう。その感覚がわからない。
- ・「耳で見る」って、聞いた言葉をもとに頭の中で想像するってことではないかな。だから一人では無理。自分以外の人がいて、その人から説明を聞いてやっとなら「耳で見る」ことができる。
- ・自分の視覚に頼る、「目で見る」と、人の言葉に頼って頭の中で「耳で見る」ってどちらがしっかり見えるのだろうか。
- ・人の言葉に頼るって、目の見えない白鳥さんだけでなく、わたしたちもやっている。その場所に行けないとき。聞いた言葉だけでその場所をイメージする。あとは誰かの思い出話を聞いて想像するとか。
- ・視覚障害者の人は、目が見えているわたしたちとは感覚や考え方が違っている。わたしたちとは違った世界を想像している。想像力という長所があり、想像力を使うことで自分だけの世界が広がっている。
- ・想像は普段から見えるわたしたちもしている。想像しなくては生きていけない。言葉から何かを想像することもあるし、経験から想像することもある。

このような語り合いを経て、授業者と子どもたちは、「『言葉』は『見ること』や『想像すること』とどう関係しているのか」という追求テーマをつくりあげた。

(2)「『言葉』は『見ること』や『想像すること』と

どう関係しているのか」について考え、語り合おう (第3～6時)

子どもたちは、共有した追求テーマを受けて、本文の描写をもとにしながら、個人追求において以下のようなことを見いだした。

【「見ること」に関する】視点

- ・わたしとマイティでは経験の違いによって絵の見え方が違っていた。その人にストックされた知識や経験によって、見え方は変わる。
- ・「見る」「見える」「眺める」はどれも違う。見たものを言葉にすることで自分の見解をより深めることができ、想像が広がっていく。しっかりと注視し、観察することが「見る」。普段視界になんとなく入ってくる程度のもは、「見える」。
- ・同じものを見ていても、それをどのように捉えるか、そのどこを見ているのか、何を感じているのかは人によって異なる。言葉によって、それに気づける。
- ・見てわかった気になっていても、実は見えていないことがある。見える人は、得た情報を頭の中で取捨選択し、不必要な情報は読み込まない。(想像しない)じっくり見ようとすることで新しい発見がある。不要とされた情報の中に発見がある。

【「想像すること」に関する】視点

- ・想像は、その人の生きてきた経験や獲得した知識によって左右される。だから、同じ言葉を受け取っても、何を想像するかは人によって異なる。
- ・「想像すること」は、見えない人の特権とも言える。見える人は「本物」や「正解」を見ることができ。言い方を変えれば、見てしまう。そうすると、正確な一つの世界しか頭の中に作り上げることができなくなってしまう。しかし、白鳥さんを初めとする見えない人は、対話を通して自由に想像を膨らませ、その人なりの絵画を頭の中に作り上げている。

【「言葉」に関する】視点

- ・見たものを言葉にするときに、その人の個性が表れる。どう見えたかという個性もあるし、見えたものをどんな言葉にしようかという個性もある。その個性を作っているものは、その人の経験や知識である。
- ・人がものごとを共通して認識できるものの道具として言葉がある。そして、共通化が難しいのが形容詞だ。「美しい」「うるさい」など、人によってその認識や程度は違うため、形容詞は難しい。
- ・ものごとの背景を知るには、視覚だけではわからないこともある。言葉の説明があってこそ、背景がわかる。
- ・言葉は昔の人の見たものや、人の頭の中など、本来は見えないものを見るための手がかりとなる。

個人追求を終えた子どもたちは、各々が追求した視点

から以下のように語り合い、「言葉」と「見ること」と「想像すること」の関係性を見いだしていった。

【「言葉」が「見ること」や「想像すること」に与える影響に関する】語り合い

- ・言葉はライブ感を持ちながら、人の見え方、想像、考えを変えることができる。他人の言葉を聞くと、受け取った人の見え方が変わる。正確に言えば、印象とか感じ方が変わる。それがよく働くこともある。マイナスに働くこともある。
- ・色眼鏡という言葉があるように、人は先入観をもつてものごとを見ています。そして、言葉がその要因になることがある。
- ・他の人の言葉を聞いた上で絵を見ると、本当にそのように見えてきたり、全く別のように見えたりする。ただ視覚的に捉える「見える」ではなく、自分の中のあいまいな印象を言葉にして考えたり、他人の視点でも考えたりすることで、自分なりの意味を作品に対してもち、「見る」ことができる。「見える」とは違い、「見る」とは見えない部分である「意味」を考えて「見る」ことだ。「見える」人こそ「見て」いないのだと思う。
- ・言葉は想像することや見ることを補助できる面はあるが、一方で言葉によって誤解を生んだり、余分な情報が邪魔になったりすることもある。言葉は人の想像に大きな影響を与える。

【「言葉」に主観と客観を込めることの違いに関する】語り合い

- ・説明する側の主観的な見え方や感想が入ることにより、それを受けた人の見え方や想像は大きく変わる。それは見えるものが変わるとも言えるし、見えるものの意味が変わるとも言える。客観だけではなく、主観が入ることで、相手にそのものの意味をイメージしやすくさせる。
- ・一方で、主観の情報を与えることにより、相手のイメージを限定させてしまったり、誤解を生んだりすることもある。「かわいい」も「にぎやか」も認識が人によって違う。だから、絵画を相手に説明するときは、主観的な言葉は入れないほうがいいだろう。
- ・主観的な印象を言葉に表すことで、もやもやとした印象を少しずつはっきりさせられる。それを共有することで、他人の目で見、自分なりの意味を考え、自分なりに作品をつくる(見る)ことができる。
- ・言葉で絵を鑑賞するには、情報(客観)だけではだめ。意味(主観)が必要となってくる。意味とは、その人なりの感想や、その絵をどう受け取ったかという個人的な思いのこと。

子どもたちがそれぞれの視点から関係性について考え、「言葉」が「見ること」や「想像すること」に与える影響や、「言葉」に主観や客観を込めることの違いに

ついて見いだしたところで、授業者は、次の時間からは、実際に「言葉」を使うこと、「見ること」「想像すること」を体験してみることを通して追求を進めていくことを提案した。

(3) 映画の音声ガイドをつくろう (第7～20時)

まず授業者は、音声ガイドつきアニメ映画の冒頭3分間を、①映像は見せずに音のみ②映像は見せずに音声ガイドつき③映像を見せながら音声ガイドつき、という3つのステップを踏みながら子どもたちと鑑賞し、感想を語り合った。音声ガイドの役割を子どもたちが認識したところで、以下の流れでさらに追求をすすめていくことを子どもたちと確認した。

- ・題材は、アニメ映画『陽なたのアオシグレ』
- ・18分ほどの映画を3パートに分ける。
- ・4人×9班編成とし、1パートを3班が担当する。
- ・以下の流れで行う。
 - ①音声ガイドについて知る。
 - ②『陽なたのアオシグレ』を観賞する。
 - ③個人で原稿づくりを行う。
 - ④音声ガイド制作者の平塚氏にお話を伺う。
 - ⑤個人原稿を完成させ、班で原稿づくりを行う。
 - ⑥班の原稿をもとに、班で音声を映像に吹き込む。
 - ⑦音声ガイドつき映画を鑑賞し、選考会を行う。
 - ⑧選考作品を平塚氏と石井氏に鑑賞していただく。

まず子どもたちは、『夢のユニバーサルシアター』(音声ガイド制作について書かれた平塚氏著作の本)を読んだり、音声ガイド制作者に焦点を当てたドキュメンタリー映像を視聴したりして、音声ガイド制作についての理解を深めた。

次に、今回の音声ガイド制作の題材であるアニメ映画『陽なたのアオシグレ』を鑑賞し、子どもたちからは、音声ガイド制作を意識した以下の感想が語られた。

- ・現実と妄想が入れ替わる場面が多く、どう表現するか難しそう。そのまま「陽なたの妄想中」と伝えてしまうのいいか、別の言葉がいいのか、それとも伝えないのいいのか。伝えない方がかえって物語の勢いを止まらせず伝えられるかもしれない。
- ・主人公である陽なたの表情をどんな言葉で表すかを追求していく。主観が入らないように、見たままを端的に表す言葉を見つけない。
- ・陽なたと時雨のやりとりや心情の変化が面白いと思ったので、鑑賞した人が心情を想像でき、二人の関係性の変化が感じられるようなガイドをつくりたい。
- ・最後のシーンは、陽なたと時雨の気持ちが一番強くなる場所なので、気持ちの表現方法も工夫したい。あの生き生きした感じを言葉でちゃんと表したい。
- ・どの情報は入れ、どの情報は入れないのか見極める。一番欲しい情報は何かを考えることが大切だ。

次に、子どもたちは個人の原稿づくりとして、映画を視聴しながら、音声ガイドの原稿をワークシートに書いていった。その際、もう一度じっくりアニメを見直す子ども、映像は見ずに音声だけで鑑賞する子ども、まずは目に見えたものをたくさん書き出す子ども、じっくりと尺を測りながら30秒つくるのに1時間かける子ども、様々であった。子どもたちが、「説明したいことが多すぎて尺におさまらない」「情報を入れるかどうかの基準はどうすればいいのだろう」といった難しさや疑問を抱いたところで、プロの音声ガイド制作者である平塚氏との出会いを設定した。

平塚氏からは、音声ガイド制作において大切にしていること、実際の制作方法についてお話をいただいた。また、子どもたちからも「視覚障害者向けに説明する際に比喩を用いることはどのような印象を与えるのか?」「場面の切り替わりが多くある際に、気をつけていることは何か?」「自分の解釈はどの程度入っても良いのか?」など、気になっていることについて質問した。その時間のふり返りが以下である。

- ・しっかり映像を見ずに、監督の意図を解釈しきれずに、解説をしてしまうのはよくない。作品の良さを消してしまうことは絶対に避けたいといけなくて感じた。だからこそ、たくさんある情報の中から大切なものを選び、拾っていきたい。
- ・体言止めが強調を与えるように、「言葉そのもの」だけではなく、「言葉が人に与える印象」という視点が大事。それは一定ではなく、状況により変わる。
- ・陽なたがデレデレしていると感じるのはどの影響?ということを考えることが大事。見ている人がデレデレと感じるのは何が見えているかと、一歩引いて考えて見る。そうすれば、求めるものに近づく。

個人の原稿を作成する時間を十分にとり、その後、自分なりの原稿をつくりあげた子どもたちは、チームでの原稿づくりを始めた。その中で、以下のような対話がなされた。

【対話1】

(電車に乗ったシグレを陽なたが大きな白鳥に乗って追いかける躍動感のあるシーンについて)

A: 「陽なたは大きな白鳥の背に乗り、電車を追いかける」にした。

B: 「白鳥に乗って風を切る陽なたが電車を追いかける」

A: あ～! 「風を切る」ね～!

C: 自分は普通に「タクシーに乗っていく陽なたが映し出される。」にした。

B: なんか、すごく勢いよく飛ばじゃん?

A: ヒュンってなるよね、途中で。白鳥が、真横に。

B: そうそう、すごい思いっきり飛んでるからさ。だから、「風を切る」かなあって。

《※4人で映像を確認する》

A：ただ、Bさんが考えたここの「風を切る」って主観なのかな。ぎりあれ（客観）なのかな。でも、「大きな」も主観だよ。難しいよね。「大きな」だって事実だもんなあ。でも感じ方は人それぞれ…。でも、どう考えても白鳥大きいもんね、普通サイズより。

B：2、3倍以上はありそうな感じ。

C：「電車に並ぶ」…いや、「陽なたが電車に追いつく」でも良いかな。

A：追いかけるのは確かにそう。

B：電車を追いかけるのは入れている。

A：その前の部分を、「風を切る」か「大きな白鳥に乗っているか」どっちの情報を伝えるか。

C：そこらへんはBパートで言っているんじゃないかな。だから「風を切る」を入れよう。

B：白鳥に乗っていることは言っていること前提でね。

A：じゃあ「風を切る」入れようか。「白鳥に乗って風を切る陽なた」か。うん、いいんじゃない。そこで、まあ初めての情報が入ることになるね。「風を切る」っていう。スピードを速めるってことが伝えられる。

C：なんかさ、主語がうしろにあるじゃん。それがわかりにくいかなって。

C：あー、確かに。

A：「陽なたが白鳥に乗って風を切る」…なんか長くない？

B：どっちのほうがいいんだろ。ただ、言葉の順番だけだけど、結構変わる。

A「白鳥に乗って風を切る陽なたが電車を追いかける」…なんかこのままの方が長く聞こえない感じがする。

《※各々で口々につぶやいてみる》

「陽なたが白鳥に乗って風を切り、電車を追いかける。」「白鳥に乗って風を切る陽なた」

C：長くなる長くなる。

A：それか「乗っている」じゃなくて「白鳥と陽なた」にする？もうセットで乗っていることはわかっているはずだから。

B：「白鳥と陽なたが風を切る」…うん、いいかも。

C：白鳥と陽なたが風を切ってるイメージね。なんかいいね。速そう！

A：そうだね、いい。「白鳥と陽なたが、風を切り、電車を追いかける」このあとは、「電車の横を飛ぶ」か「電車の横に並ぶ」か。それか「電車に並ぶ」かな？続けて、陽なたの動きだから、「陽なた」は入れなくていいね。

B：うん、「陽なた」はいらない。最初で主語の印象つくからシンプルに「電車の横を飛ぶ」でいい。

【対話2】

(ヒロインであるシグレが涙を流しているシーンを

どう表現するかについて)

D：「シグレが泣く」でいいでしょ。

E：いや、それだとあつけない。このシーンは大事だよ。もっとロマンチックにしようよ。

F：いや、事実を淡々と言った方がいいよ。それが音声ガイドでしょ。

E：だけど、陽なたとシグレちゃんがやっ与会えたシーンだよ。ここは気持ちを込めようよ。というか、シグレちゃんの気持ちを最大限出そうよ。

F：いや、気持ちを込めちゃダメでしょ。音声ガイドが見る人の邪魔をしちゃうよ。

G：邪魔にならない言い方ないかな。

《※各々つぶやく》

「シグレの瞳から涙があふれる」「シグレから涙が流れる」「シグレから落ちる涙が風で陽なたの方へ行く」「シグレの涙が悲しくもあり、力強い」

D：やっぱりシンプルに「泣く」だよ。さすがに「悲しくもあり」は言い過ぎ。

E：そうだね、でも気持ちは入れないにしても、「泣く」はこのシーンと合っていないし、それこそ誤解を与える。「シグレの瞳から涙があふれる」でどう？「目」じゃなくて「瞳」って言うだけで素敵な感じがする。素敵な人の目からなんか良い意味の涙が出ている感じがしない？「瞳」って。

F：そうだね、「目」だと無機質。理科とかみたい。

「瞳」だと文学とか歌詞っぽいね。

F：映像よく見ると、涙あふれてないよね？こぼれるじゃない？

E：「あふれる」だとたくさん、「こぼれる」だと少しって感じがする。

【対話3】

(陽なたの妄想の中で、シグレの乗った空飛ぶ電車の車両が1両ずつ切り離され、空から落ちてくるシーンについて)

H：「電車が崩れ始める」

I：崩れる？「車両が切り離される」にしたけど。

J：「切り離される」

H：「切り離される」？

K：え、「崩れる」じゃないの？

I：だって車両が連結されているのが離れているから。

K：切り離されてるっていうか崩れてるよ

J：車両が崩壊しているみたいになっちゃうよ

I：ねえ、そんな感じになっちゃうよね、それだと

K：ああ…

I：「崩れる」だとバーってなってさ、粉末状に飛んでくみたいな。

H：わかるけどさ～。

K：「切り離される」って感じじゃないじゃん。

I：切り離されてない？

H：切り離されてるって、なんか意図的にやってる感じじゃん。

K：そう、意図的じゃないから、ここは。
《※4人で改めて映像を見ながら、対話を続ける。》

I：「崩れる」はなんか…しっくりこない。

H：「崩れる」だよ

I：崩れてないじゃんこれ。

H：崩れてるよ。

J：「崩れる」だとなんか積み木みたい。積み木感がある。

H：積み木感あるじゃん、これ。

I：「崩れる」って何か違うと思うんだけど。

H：「切り離される」も違うよ。

K：そうそう、「切り離される」だと、スパンスパンってやってる感じになっちゃう。

H：そう、意図的な感じがする。
《※Jがネットで意味を調べ、4人で見る。切り離す：一つの物や結びついている物を、切って別々にする。崩れる：まとまった形をし、安定していた物が、支える力をなくしてばらばらになる。》

J：「切り離す」の未然形だ。う～ん。
《※しばらく沈黙》

I：「崩れる」はやっぱりおかしいよ。

H：離れるもおかしい。

I：いや、まだ切り離されるの方が…連結の対義語が切り離すだから。

J：「電車が崩れる」…ん～。

K：でも、なんか…切り離されるだとスパンスパン…「崩れる」だとガッシャーんって。

H：電車がバラバラに落ちてくる。

K：バラバラ…「電車がバラバラになる」とか。

I：「崩れる」って、想像してみ？

H：「切り離される」って。想像してみ？誰かが意図的って感じになっちゃうのはやっぱりおかしいよ。

I：え～意図的？そうか～？

H：誰かが意図的に切って離れたみたいな感じだよ。

I：「車両が離れる」…ん～。あ！「落ちてくる」でいいんじゃない？

H：「落ちてくる」じゃそのままの形で落ちる感じがしちゃうじゃん。

I：も～なんなの、一体！

K：だったら「電車の車両が落ちてくる」がいいのかな…

J：「電車の車両が」ってなんか変でしょ。

K：語彙力が無いな、なんか。「電車の乗るところが落ちてくる」…ん～。
《※しばらく沈黙》

I：え～どうしよう。

K：「落ちてくる」を最後に入れば「崩れる」でも「切り離される」でもどっちでも良い気がする。

わかる？

H：え、わかんない。「切り離される」はちょっとおかしい。

K：崩れ落ちてる感の方があるよね。

I：崩れてない。絶対崩れてないよ、こんなの。電車が崩れる？バラバラになってないじゃん。

K：でも「人間が崩れ落ちる」って実際に人がバラバラになるわけじゃないじゃん。でも、そういう言葉あるじゃん。

【対話4】

(現実と妄想が何度も交錯するシーンについて、)

L：じゃあ、ここで「妄想に切り替わる」って入れる？
妄想をどう表現するかが問題だよな。

M：なんか無理にスタートのところで「妄想」って言わなくても良い気がする。終わりのところで、電車が妄想だったって気づけばいいんじゃないかな。スタートで無理に言わなくても。普通に鳥が出てくる時点でおかしいなって思うんじゃないかな。

N：なんかさ、わたしたちも妄想と現実の境目がわからなかったじゃん？だから、わからないままでいいと思う。無理に伝えようとしなくて、わたしたちもわからないんだから、そのわからないままを目の見えない人も楽しんでもらうって感じでいいんじゃない？

M：おもしろいね、それ。

N：最初の陽なたに都合の良い妄想は、はっきり「妄想」って言っても良いけど、後半の妄想と現実が混ざり合うところは、混ざってもらえば良い。

その後、子どもたちは、完成した原稿をもとにしながら音声動画を吹き込み、音声ガイドを完成させ、選考会を行った。選考会の中で、仲間の言葉選びや表現の工夫を知り、改めて自分たちの言葉を見つめ直していく姿があった。

そして、選考会にて選ばれた作品を平塚氏と石井氏に鑑賞していただき、講評をいただいた。「『新緑の木』や『紫陽花』といった季節の情報をさりげなく教えてくれる班のガイドは想像がしやすかった。」「説明だけでなく、監督の意図を汲んだのであろう表情の表し方が素敵だった。」といった価値づけや「ガイドが足りず、途中で頭の中が真っ暗になってしまった箇所があった。」といった課題点も挙げられた。

(3)最終追求をしよう(第21～23時)

その後、子どもたちは、題材のまとめとして、二冊の本を読み語り合い考えたことと、音声ガイド制作をしたことを通して、「『言葉』とは？」をテーマに最終追求を行い、以下のように書き表した。

【言葉によって、思考が深まり、視野が広がる】

・今回、音声ガイドを作りながら、班の人と言葉への

イメージが違うことに気づいたり、自分たちが使った言葉で石井さんに「ワクワクした」と言ってもらったりしたことによって、言葉は、いろいろなもの（想像、考え、見え方）を豊かにするためにもあると考えた。言葉があるかどうか、どんな言葉かによって、それらは大きく影響を受けると言える。

- ・「言葉」は、「考え」をより深めていく力がある。言葉を用いて対話することは、その人の「視野」を広げてくれる。意見において、絶対解は存在しないから、意見には違いが生まれてくる。この違いに気づくこと、新たな発見をすることがより自分の「視野」を広げてくれる。言葉で対話することによって、様々な方向から物事を捉えることができるようになり、「考え」はより磨かれたものになる。
- ・言葉には視野を広げ、新たなものを見つけたり、今までより具体的に見られるようにしたりする力がある。言葉にしようすると、注目するポイントが全体に広がり、詳しく言おうとすることになる。また、自分の考えを言葉にすることで新しく考えが生まれる。そして、言葉によって誰かと考えを交流することで、もとの考えもどんどん広がっていく。

【言葉によって、ものごとを認識する】

- ・言葉とは、脳が認識した事象を断定するものである。ふわっとした「こんな感じ」という感覚を明確にして、理解を深めるもの。例えば、シグレの容姿について、音声ガイドを作る前は「可愛い子だな」くらいの認識だったが、特徴一つ一つを言葉にしようとする中で、「まわりの子と結構髪色違うな」「目の色からするとハーフなのかな」という新しい感想が生まれた。事象をより詳しく認識したり、より考えを深めたりするのは言葉が必須である。
- ・「言葉」とは、もやもやとしたものをはっきりと形づくるものである。見たものを言葉で共有することで、他の人の意味や自分の意味を整理し、そこからまた別の見方で見て言葉で共有するという、見ることと言葉の繰り返して、自分なりの意味を深めていく。それにより、もやもやとした印象を少しずつはっきりさせ、自分なりに「見る」ことができる。
- ・言葉とは、ものごとを分類し、認識を助けるものだと思います。わたしたちは、目で見ているもの、他の五感で感じたもの、感情や気持ちまでも言葉で表して分類しています。
- ・言葉は、「見えない」を「見えるようにする」力をもっている。言葉があるから見える・見えないに関係なく人は「想像する」ことができる。はじめは、目の見えない人にとって、「見ること＝言葉」なのではないかと考えていたが、見える人にとっても「見ること＝言葉」な部分があるのではないかと考えるようになった。これは同時に、見える人であっても、

言葉がないと見えない部分があることを意味し、言葉は見るために必要不可欠なツールであると言える。

【言葉の要素について】

- ・言葉には、「客観的な情報」と「主観的な意味」がある。客観的な情報とは誰もが同じように思うこと、AIでも伝えられること。主観的な意味は、その人だけが思うことなど、人にしかない感性のことだ。
- ・言葉とは、自分の思いや考え、知識などを伝えるものだとも考える。そこにその人なりの経験・知識が入ってきて、それに影響を受ける。『目の見えない人は世界をどう見ているのか』では、絵の鑑賞について、自分なりの「意味」を手探りで見つけていくとある。その「意味」とは、自分の置かれている状態、状況、立場によって変化するもの。そして、それは、その人の経験や知識によってつくられるとも考える。
- ・人が言葉を習得するのに必要なのは、「見る」とこと「想像する」ことだ。例えば、りんごを説明するならば「丸くて、赤い」と説明する人が多いだろう。しかし、生まれてから一度もものを見たことのない人は「丸ってどんな?」「赤って?」となってしまう。つまり、「見る」が必要なのである。次に、「美しい」という言葉を習得するのはもっと大変だ。目の見えない人はおろか、見える人でも難しい。「花は美しい」「白は美しい」しかし、「花＝城」ではない。つまり、形容詞は、人の想像の中にしかない概念的なものである。だから、人によってズレが出る。つまり、言葉には、「見る」ことによって習得できるものと「想像する」ことによって習得できるものがある。
- ・言葉が意味をもっているのではなく、言葉に意味をもたせる。自分たちは、陽なたに見送られるシグレの表情の表現に悩んだ。単に「視線を落とす」だとシグレの心情の深さが伝わらないと思い、議論の末、「シグレの青い目が輝きを失う」とした。太陽の陽なたがいるからこそ、シグレが輝けると自分たちは捉え、このように表した。気づけば、自分たちで言葉に意味を持たせていた。
- ・わたしはよく小説を読むので、挿絵がなくてもその場面を想像できることは知っている。ラジオも音声だけで、相手の表情がわからないままトークしているのを聞いているが、それでも相手の表情が想像できる。小説やラジオを楽しめるのは、「想像力」があるからだ。「言葉で伝える」は言葉単体ではなく、「想像」も伴うのだとも考える。

【言葉の与える影響について】

- ・今回の題材で言葉が人の想像に与える影響について実感できた。言葉一つで想像は激変し、たった一文字のつなぎ言葉（に・が・は・も など）でも意味

が変化することを実感した。言葉が人に与えるものはとても大きく、言葉によってできた想像で、その人なりの世界を広げていくことができる。

- 言葉によって映画のよさをひきたてたり、逆に面白さをなくしたりすることもある。言葉によって、受け手の感じることは違う。同じことを表す文でも、語順が違えば印象に残る言葉が変わる。文の最後が体言だと、それにピントが合い、最後が動詞だと、その動作が印象に残る。言葉によってピントが合うものが変わり、視点が誘導される。だから、言葉は、見るものを変えるという力もあるのだと思った。そして、見るものが変わると、印象やその場面の意味も変わって形づくられる。ソーシャルビューと音声ガイド、目的は違うが、どちらにも共通して言えることがある。それは、言葉によって見方や視点が変わり、形づくられるものや意味、印象にも違いが生まれ、想像されるものも変わる。言葉は見るものや想像するものに直結するくらい大きく関わっている。
- 言葉は、白鳥さんの頭の中で作り上げられる作品を助けている。そのとき言葉は、二つの役割を果たす。一つは、白鳥さんの頭の中の構想を固める役割だ。どこに何があるか、「客観的視点」が主となった説明が、白鳥さんの作品を作り上げる土台となっている。二つ目は、白鳥さんの想像を膨らませる役割だ。言葉を発する人自身がかみ砕いた「主観的視点」を基にした解釈・表現は、本物の作品と白鳥さんの作品の間のギャップを補い、「想像する」ための手がかりとなる。これら二つの役割は、つながりをもって、視覚障害者に非常に大きな影響を与えている。
- 本の中の白鳥さんと実際に出会った石井さん、二人に共通しているのは、「（視覚によって）最終的な答えを知ることができない」という点だ。わたしたち「自ら視覚に頼ることのできる」人は、必ず「答え」を知りたくなる。それは、伝えられた情報で組み合わせた頭の中の作品と、目で確認できる原作品との違いを認識し、修正したいという欲求があるからだ。「正解」がわかるから、「正解」に辿り着こうとする。しかし、「視覚を自由に扱えない人」は目で「見て」正解を認識することができない。正解を知るのではなく、自分の中に導き出す必要がある。そんなときに使えるのは「想像すること」だ。「言葉」には、想像を膨らませる際のヒント・手がかりとなり得る要素が含まれている。「言葉」が人に与える印象は非常に大きく、必ずしも「同じ言葉や文」から「同じ解釈・同じイメージ図」を思い描けるわけではない。ただ、それは良くも悪くもあるだろう。皆が皆、同じ情景を思う浮かべる必要がある部分と、想像の余地を残し、イメージングする楽しさを得たい部分もある。これらによって使う言葉のチョイスは変わってくるだろうが、忘れてはいけないのは、

「言葉は、人の想像や見方に、直接触れることのできるもの」だということだ。白鳥さんは、様々な表現を用いて表されるその人なりの解釈を、言葉によって感じとっており、その余白を楽しんでいた。石井さんは、音声ガイドを頼りに映画の情景・シーンを頭で思い浮かべており、言葉の一つ一つから情報・雰囲気を感じとっていた。これらの文章・姿を見ていると、「言葉」が人に与える印象、影響がすごく大きいことに気がついた。同じ意味の「言葉」でも表現が違うだけで、人が感じとるイメージは大きく変わってくる。もしかしたら一般に使われている「言葉」でも、状況に応じては適切なものでなくなる可能性もあり得る。「言葉」は、それだけ人の考え方・感じ方に関わるものであり、「視覚」を失っている人が頼る価値のあるものである。「言葉」は日常におけるコミュニケーションツールの一つであると同時に、人の頭や脳に自分の想いを渡すときに、想いが形を変えたものである、と言えるのではないかと。そして、「言葉」となったその想いは、人の頭や脳に直接的な影響をもたらすのではないかと思った。

【今日の言葉の使われ方について】

- 言葉は、人間がもつとても優れた能力である。しかし、最近、言葉としての情報は減り、画像や動画などの視覚情報が増えた。しかし、視覚障害者は画像や動画が見られないから、視覚情報が増えている世の中でも、必然的に言葉を使う。視覚障害者が一番言葉に敏感で、言葉を最大限使って生きていると言える。逆に言えば、視覚情報に頼っている人の言葉への関心や力は衰退していつているのかもしれない。
- 目が見える人は実際にその場を一緒に共有している人とは「すごいね」や「美味しいね」と何かと短い言葉を使いがちだ。それで、通じ合う。日本には、「空気を読む」という言葉があるくらいなので、言葉でわざわざ伝えなくても察しろという文化もある。今回初めて目が見えない人にガイドをすることで、それだけ言葉が省かれていることに気づくことができた。本来、見えている人でも、言葉でしっかりと伝えるべきだが、よりわかりやすく伝えようとする工夫が言葉を退化させている。例えば、図を使ったり、ジェスチャーをしたり、さらには画像や映像など。そんな言葉に頼らなくなってしまっている現代において、わたしは今回の授業で、言葉の可能性が自分の中で大きく広がった。あれだけ言葉にこだわり、なんとか表現しようとみんなで苦労したことは、本当は当たり前のことであり、これからも言葉を大切にするためにしていくべきことなのだろう。
- 「言葉」とは、情報を相手に伝える一つの大きな手段だと考える。正確な情報を伝える際には、注意して言葉選びをすることが重要である。なぜなら、自

分は事実であると思っけていても、実は自分の主観であった場合、受け取り手は、違うものを想像してしまうからだ。ただ、ここで難しいのは、主観を入れた方が相手が想像しやすいという場面や状況もあるということだ。「ゆっくり」「おっとり」「速い」「どんより」などは、一見主観のように思えるが、伝えることによって、受け取り手の想像が豊かになる。だから、相手に伝える際の言葉選びは慎重にしていけることが大切である。また、伝えたいことをどういった言葉で表現するかは、日々言葉を学んで自分の言葉を増やすこと、いろいろな経験をし、言葉の印象や感じ方を増やすことで可能性は無限に広がるし、豊かになっていく。

4 分析と考察

題材を通して、以下のような子どもの姿があった。

(1) 言語感覚を磨く姿

①複数の視点をもって言葉を吟味する姿

【対話1】に注目すると、主観と客観、語順、テンポ、スピード感を出す、という視点をもって言葉を吟味していることがわかる。子どもたちは、はじめ、以下のように表現していた。A「陽なたは大きな白鳥の背に乗り、電車を追いかける。」B「白鳥に乗って風を切る陽なたが電車を追いかける。」C「電車が映し出される。陽なたが電車に並ぶ」そして、【対話1】を経て、「白鳥と陽なたが風を切り、電車を追いかける。」というガイドをつくりあげた。また、石井さんから音声ガイド制作においてこだわった部分を聞かれた際、Aはこの表現に触れ、「ただ説明するのではなく、躍動感や勢いを想像してもらうことを意識した」と語った。また、石井さんから『追いかける』か、『風を切り、追いかける』かで、随分想像する光景が変わってくる。『風を切り』は、臨場感のある表現で、映画の躍動感をわたしも楽しむことができた」と、価値づけがあった。【対話1】の中で、子どもたちは、複数の視点をもってよりよい言葉選びをすることで、言語感覚を磨きながらこの表現に辿り着いたと言える。さらに、彼らのこの表現について、他の子どもが最終追求の中で以下のように触れている。

・「風を切る」という表現がわたしは特に好きでした。直接的な伝え方で、そのシーンを強くイメージすることのできる言い方だと思います。違う言い方もできたけど、どうしたらイメージしやすいか、伝わりやすいかということたくさん考えて作ったものだということがわかりました。単なる「説明」ではなく、「想像を補助するもの」になっていました。

・「白鳥と陽なたが風を切り」という表現が素敵でした。このシーンは白鳥が横に体を傾けて一気にスピードを上げる躍動感のあるシーンとなので、それを短い言葉で的確に表現していて感動しました。

表現にこだわる中で吟味した言葉が他の子どもの言語感覚にも影響を与えたと言える。

【対話2】においては、作者の意図や作品の世界観、登場人物の心情をよりの確に表現できる、という視点をもって言葉を吟味している事がわかる。Gが書いた最終追求が以下である。

・二冊の本を読んで考え、音声ガイドを作って大切だと感じたことは、「想像の余地を残す」ということだ。映画や本、ドラマなどは、想像や考察をする人も多いです。物語の行く末や描写の意味、場面の雰囲気など。最初、ぼくは、ありのまま全部を伝えない意味が理解できなかった。しかし、想像してもらうためにふさわしい言葉を選ぶというおもしろさを今回の追求で見つけることができた。そして、「言葉は想像への入口である。」という結論に至った。

Gは、グループでの原稿づくりにおいて、シグレが涙するシーンにふさわしい言葉選びに悩む中で、仲間たちもつ言葉への感じ方の違いに触れながら、言葉のもつイメージや相手に与える印象と向き合っていた。そして、最終追求においては、言葉を通して相手に想像してもらうことの価値を見いだしている。

②言葉のもつ印象が人によって異なることに気づく姿

【対話3】において、映像にふさわしい言葉は、「崩れる」か「切り離される」か、子どもたちの考えが割れた。対話をしていく中で、自分が抱いている言葉への印象と他者が抱いている言葉への印象が異なることを子どもたちは実感していつている。辞書を用いてそれぞれの言葉の意味を確認し、双方共に理解しているにもかかわらず、映像をより正確に想像してもらうのにふさわしい言葉選びとなるとその感覚が異なり、時間をかけてもなかなか結論が出なかった。【対話3】の後、HとIは以下のようにふり返っている。

・班で共有してみて、自分の中ではしっくりきていた表現が意外と他の人はしっくりきていないことがわかった。「切り離される」は意図的な感じがする、「崩れる」は粉みたいにバラバラになる感じがする、その違いにより止まってしまう、決まらなかった。

・「電車が崩れる」「電車が切り離される」で意見が分かれた。「崩れる」では、細かくバラバラになってしまうこと、整っていたものが乱れることを想像してしまうため、見ている人に疑問を抱かせてしまう。「切り離される」では、誰かが意図的にやった感じがして違うという意見が出た。同じ言葉なのに、人それぞれの解釈があって、実は違うことを考えていたり、違う受け止めをしたりすることを実感した。

互いに辞書的な意味を理解はしていても、人によって言葉への印象が違うことに気づくこの姿も、言語感覚を磨いている姿と言えるだろう。

また、別の班では、言葉のもつ印象が人によって違

うことに気づき、その微妙な感覚の違いにこだわろうと、登場人物が落ち込みながらしゃがみこむ姿を、「うつむく」と表現するか、「ひざまずく」と表現するか吟味していた。さらには、類義語辞典を用いて、「うちひしがれる」「しょげる」「うつむく」「がっくしく」「膝をついてうなだれる」を候補に挙げながら、よりふさわしい言葉を選ぼうとする姿があった。

③言葉に意図を込めようとする姿

【対話4】の班は、この対話の前に、現実の世界と妄想の世界が交錯する場面について、どこまでが現実でどこからが妄想なのかについて解釈が割れていた。時間をかけて議論したのちの最後のやりとりが【対話4】ある。この班は最終的に、自分たちが味わった現実と妄想の入れ替わりの混乱を、映画の鑑賞者にも味わってもらおうという見せ方に行き着いた。そして、彼らはこのあと、その混乱を味わえるようにするという意図を言葉に込めていった。

また別のある班は、議論の末、妄想の世界を「妄想」という言葉で表現することで、説明感が出てしまい、鑑賞者が作品の世界観に入り込むことを妨げてしまうという考えに行きついた。その後、それぞれの世界で見えるものを何度も見直し、対比（雨と晴、空を飛ぶと道を走る、暗いと明るい、タクシーと電車、黒と青）があることに気がついた。そして、自分たちのガイドによってその対比を表現し、鑑賞者に作品世界へ入り込んでもらうという意図を言葉に込めてようとしていた。この班の子どもの振り返りが以下である。

・ここは、ドキドキハラハラするシーンなので、観ている人にもそれを味わってもらうために、「現実」「妄想」という言葉を入れたくないと思った。それらを使わず表現するために、何度も映像を見直した。最終的に私たちが注目したのは、天気。現実には「雨」、妄想は「晴れ」で、陽なたの気持ちともリンクしていて、この情景描写を使おうということになった。

・映像を何度も見ているうちに、「妄想」という言葉は使いたくないという思いが出てきた。この二つの場面の入れ替わりは、観ている僕たちが陽なたに感情移入できる部分。しかし、「妄想」と言ってしまうと、冷めてしまう気がした。映像を見返し、現実と妄想の対比（雨と晴、空を飛ぶと道を走る、暗いと明るい、タクシーと電車、黒と青）に気づいた。その中で、天気に注目し、それを言葉で伝えることになった。映像にある、雨音や水たまりを踏む音、それに僕らのガイドである「雨」や「青空」が加わって想像の補助となり、観ている人に楽しんでもらうということ意識した。

どちらの班も、ただ説明するためのものとして言葉を使うのではなく、自分たちが大切にしたい意図を言葉に込めようとしていることがわかる。

(2) 「言葉」に対する見方・考え方を豊かにする姿
最終追求の記述から、子どもたちは、以下のことを見いだしたと言える。

- ①言葉によって、思考が深まり、視野広がる
- ②言葉によって、ものごとを認識する
- ③言葉をつくる要素について
- ④言葉の与える影響について
- ⑤今日の子どもの言葉の使われ方について

5 おわりに

言葉を生み出したくなる場に子どもたちを立たせ、意図をもった題材構想をすることにより、「『見ること』と『言葉』の関係性について自分の考えを更新していく姿」「こだわりをもって言語を吟味する姿」が多く見られた。そしてそれは、本校国語科の願う「言語感覚を磨く」学び、「『言葉』に対する見方・考え方を豊かにする」学びであると言える。子どもたちは、言葉をつくる要素や言葉の役割、価値に気づくだけでなく、自分の感性や言葉の選び方の特徴を自覚し、言葉選びを大切にすることでまわりに与える影響が大きく変わることを、身をもって実感していた。

以上のことから、本実践を通して、子どもたちは「豊かな言語感覚をもつ人」へと近づくことができたと言えるだろう。

【参考文献】

- 伊藤 亜紗(2015)『目の見えない人は世界をどう見ているか』光文社新書
- 川内 有緒(2021)『目の見えない白鳥さんとアートを見に行く』集英社
- 末永 幸歩(2020)『13歳からのアート思考』ダイヤモンド社
- 浜本 純逸(2011)『国語科教育総論』溪水社
- 平塚千穂子(2019)『夢のユニバーサルシアター』読書工房
- 静岡大学教育学部附属静岡中学校(2023)
『令和5年度教育研究協議会要項』

【参考資料】

- N H K 『ハートネットTVフクチッチ』
(https://www2.nhk.or.jp/school/watch/bangumi/?das_id=D0005170810_00000)
- Palabra株式会社公式サイト
(<https://palabra-i.co.jp/>)
- UDCast公式サイト
(<https://udcast.net/>)
- シネマ・チュプキ・タバタ公式サイト
(<https://chupki.jp/>)
- シマネシネマオノザワ公式サイト
(<https://onozawacinema.com/>)